

第一部 特集 明治大学史の展示

一 明治大学史展の歩み

鈴木 秀幸

1 大学史展示の位置と意義

(1) 各大学から学んだこと

はじめて大学史活動に関わった時の筆者の任務は編纂であった。それは『明治大学百年史』のことであり、通史編の刊行が始まった間もないころ、すなわち一九九〇（平成二）年四月からである。日々が編集・執筆、それにとまなう資料調査や目録作成、あるいは関連業務に追われた。

予定通り業務が進む内に編纂が、大学史活動（当時は「大学史」と称していた）の全てではないと思うようになった。自分なりに大学史活動に関する欲求が徐々に高まったのであり、また視野を広げる余裕が出てきたといっただけでもない。そして、その対象の第一が展示であった。当然のように、明治大学における大学史展について、直近のものを探した。ところが驚くべきことに、戦後にお

いて明治大学史展はたったの一回、しかもそれは一九五〇（昭和二五）年のことであった。約半世紀前の展示の全容を知ることがはもはや不可能に近いと思った。

そこで、その頃、大学史展を行なった大学を調べることにした。それはさほど難しいことではなく、明治大学も所属する大学史の協議会、当時の関東地区大学史協議会（現在の全国大学史資料協議会）の加盟校にたずねればよかったのである。とりわけ百年史に関する大規模な展示を行なった中央大学の大学史編纂課からは多くの資料と懇切丁寧なアドバイスをいただいた。また企画展を行なった神奈川県大学の大学資料編纂室からも同様の協力を得た。さらに、本格的な常設展示場を有する日本女子大学の成瀬記念館、成蹊大学の学園史料館を何度か訪ねて、教えを受けた。

その常設展示場を持つ大学については、その後、明治大学史料委員会（以下、史料委）の大学史紀要『紫紺の歴史』において「大学史料館を訪ねて」と題し、連載で紹介したことがある。例えば創刊号（一九九七年）では成蹊学園・学園史料館について、「キャンパスの一等地に威容を誇る同館は外形（施設・設備）、内容（活動）ともども大学史料の保存・利用、さらにそれだけではなく今後の大学のありかたを考える際に大いに参考となり、また指標ともなる」などと綴った。以下、第二号は日本女子大学・成瀬記念館、第三号は東北大学・記念

資料室、第四号は國學院大學・百周年記念室、第五号は同志社社史資料室・Neesima Room について、その見聞録を綴った。いずれとも施設・設備だけではなく、その展示内容、さらには担当者のご概に影響されることは多大であった。と同時に、いつかは明治大学でもこのような常設展示場を開設したいものと思ったものである。

(2) 明治大学史の展示について

明治大学百年史編纂の完結がほぼ読めるころになると、大学史活動における視野は今まで以上に広がった。展示にそくして述べれば、ついに編纂終了二年前の一九九三年一〇月に「明治大学の歴史展」が実現した。また編纂が終了した一九九五年の十一月には「明治大学記念館歴史展」を行なった。

これらの展示については、本稿の後半でやや詳しく述べることとし、ここでは割愛するが、このころから筆者は「広がり」ということばを盛んに用いるようになった。例えば百年史編纂事業の改組によって成った大学史料委員会発行の創刊号（前出）では「大学史の広がり」という表題で一文にまとめた。むろん、展示場を含めた大学史料館の開設およびその活動を展開したいがためであった。その後、筆者はこの「広がり」に、さらに「深まり」ということばを加えた。すなわち前者が主に広報・教育（展示も含む）とするならば、後者は主に調査・研究としたのである。この「広がり」と「深まり」に関する論については一九九九年一月に金沢大学において開催された全国大学史資料協議会全国大会で発表するとともに、その年度の同協議会の研究叢書に「資料の調査・収集をめぐる諸問題」と題した論考においても少々、ふれた^①。

またこの「広がり」・「深まり」論は二〇〇三年四月にオープンする明治大学史資料センターに影響を与えた部分が少なくない。その詳細は同センター事務室刊行の『明治大学史資料センター事務室報告』第二十五集中の「大学史資料館と資料」を参照されたいが、いずれにしても年間約二〇項目の業務について、いわゆる「活動項目」として「編纂」・「展示」・「サービス」を掲げた。また一方、「対象項目」として「創立者」・「校友」・「地方・地域」を定めたのである。例えば展示の場合は創立者展、校友の展示、地方での展示といった具合である。すでに察知できるように「広がり」と「深まり」の理念は集約的にこれら活動項目・対象項目に含まれているわけである。

なお、この明治大学史資料センターは念願かない、二〇〇四年四月に常設展示場を開設することができた。また学内の別の場所でもいくつかの企画展も行なっている。このことは後章に譲るが、いずれにしても、「広がり」・「深まり」論、その延長上の「活動項目」・「対象項目」による大学史活動論はセンターの展示活動に直接・間接に生かされているのである。

2 戦前の明治大学史展

戦前の明治大学における大学史展については、近年『歴史編纂事務室報告』第二十三集に「大学史展の歩み」としてまとめたことがある。したがってここでは、同稿と重複する部分が少なくないことを断っておきたい。

(1) 明治教育文化展覧会

編纂に関しては、明治三四年に『明治法律学校二十年史』を刊行し、その改訂版も六版に及んだ明治大学であるが、大学史の展示を行なうのは、昭和に入った三年四月のことである。やはり展示の前に、編纂が先行したというか、編纂の次に展示が登場したのである。問題はなぜこの時期に行なわれたのかということである。確かに政治的には国家的な飛躍をせんとし、また社会生活的には欧米の文化思潮に強く影響された時期でもある。

個別、明治大学にそくして見れば、はじめ大学当局としては創立四五周年記念行事を企図していたのである。それでは創立四五周年・昭和元年の頃はどのような学内状況であったのかということである。実は、明治大学の場合、大正九年四月に大学令による大学昇格、同年五月校歌の公示、翌年二月に予科校舎の新築、さらに同年四月と翌年四月には専門部に二部が設置されたのであった。また一方、この時期は「植原笹川事件」、白熱党やオーロラ会の結成等々、学生を中心として反体制運動が盛り上った時期でもある。このような時期に全学的に創立以来の自校を自覚し、再認識するとともに、今後の拡充と発展のために記念事業を打とうとしたのである。しかし、この計画は大正一二年九月に頓挫とんざをきたす。それは関東大震災の発生であり、明治大学は壊滅的な打撃を受けたのである。だが、役員教職員・学生・校友一体となった復興事業により、校舎の建築が進められた。そして復興のシンボリックな存在である記念館が、昭和三年三月に竣工したのである。したがって、この明治教育文化展覧会はその復興記念のためのものであった。

展示は、記念館に連なる左側新館（のちの一号館）の四階七室が会場となり、二日から四日間、開催された。むろん明治大学に關するものも出品されたが、それとは関係のないもの、いわば珍品・秘宝に類するもののがかなり多く見うけられた。また校友会によるスポーツの賞品・写真等、現状を示す展示品も目立った。このことからすれば、この展示は、大学史展というよりも、大学展に近いものであった。実際、この展示の中心となったのは専門部の教員の系列にあった藤沢衛彦と商議委員での中に法学部教授として大審院判事から迎えられた尾佐竹猛という卒業生であった。この二人は歴史資料の収集家としても著名であり、多くの貴重、かつ珍品的なものを提供したと思われる。

いずれにしてもこの展示は、大学展的であり、また実行上の組織は個人に頼るところが大であった。とはいえ、明治大学において初めて大学に關する大規模な展示を行なったことの意義は大きい。

(2) 明大五十年史料展覧会

さきの明治教育文化展覧会から三年後、明治大学はまた比較的規模の大きな展示を昭和六年の一月に行なった。すなわち一日から八日間にわたった明大五十年史料展覧会である。それは表題からも察知できるように創立五十年祝賀の一環であった。

展示そのものの目的は当然、創立以来半世紀を経た明治大学の足跡を振り返るためであったことはいままでもないが、さらに現状を披露するためでもあった。展示品は、前回と同様同類のものに、さらに刑事関係のように学内陳列品を援用したり、あるいは映画資料のように有志・サークルの力を借りた形跡もある。さらに予科生に

よるクラス発表も大々的に行なっている。このことからすれば、前回の大学展がさらに拡大・発展した形といえよう。

このころの日本は恐慌から立ち直ろうとし、さらに列強に伍するために国家主義・軍国主義的色彩が強まりつつある頃である。そうした中において明治大学は学内的には政治経済学部を設置後、六年を経過し、総合大学として軌道に乗り、さらに商業学校、女子部開設と注目されることが多々あった。そうした教育面のみならず、制度調査委員会が発足、抜本的・統一的に学内の組織・規則等、体制の見直しが行われはじめた時である。こうした未来ある学校として校威発揚のための行事のひとつとして開催されたのである。

なお、この時は前回の尾佐竹・藤沢に、さらに大谷美隆（法学部教授）や伊藤省吾（学生課長）といった歴史学に関心が深い教職員が名を連ねていることからすれば、前回よりは組織的には拡大したといえよう。³

(3) 近世文化展覧会

創立五〇周年祝典の次は、六〇周年のそれが実施された。それは昭和一五年一月八日から四日間であった。前回が昭和六年であるから、一〇を足せば当然、昭和一六年のはずである。では、なぜ一年繰り上げられたのか。それは、同年、しかも同月に紀元二六〇〇年祭の式典が催されたからである。この太平洋戦争開始の一年前、国内では大政翼賛会が発足し、また大日本産業報国会も設立された。対外的には、軍部が北部仏印へ進駐、日独伊三国同盟が締結された時である。また学内にあっても前年の昭和一四年四月には、専門部に興亜科が新設されたり、教練が必修となったのである。

こうした状況の中で行なわれたこの時の展示は明治大学の歴史に關するものも見うけられるが、その多くは幕末維新以来の著名人に關する遺品が占めている。また英照皇太后・明治天皇ら皇族・華族關係者、梅田雲浜・坂本龍馬ら勤王家、乃木希典・東郷平八郎ら軍人、陸軍省・海軍省らの官公庁などの陳列品が目につくのは、時局を反映しているからである。今回も同展には尾佐竹・藤沢が関わっており、彼らの所蔵品、もしくは知人らの協力によったことが、あらゆる分野・種類にわたる展示品からも分かる。中には幕末の町火消・俠客として新門辰五郎に關するものまである。まさか、明治二一年、現在の山形県山辺町より上京し、明治法律学校に入学した多田理助が同人の孫の家に下宿したためではなからう。

このようにして見てくると、やはり戦前の大学史展は大学展というべきである。また組織的というよりもわずかの關係者、そして彼らのコレクションや人脈によりなされたものである。また展示に關しては大学資料よりも学外の珍品・秘宝が主であり、いわば陳列場に近いものであった。

3 戦後の場合

(1) 創立七十年記念展覧会

創立七〇年の記念式典は昭和二五年一月一七日から一九日まで行われた。本来は翌年にすべきであるが、前回は踏襲したためである。⁴この時には大学を取りまく状況や環境は一変していた。政治社会的には敗戦後、植民地となり、GHQの統制のもと、次々と戦前の清算と民主化が推進されていた。ちなみに昭和二五年を見れば、

自由党の発足、公職選挙法の公布、文化財保護法の公布等々である。学内にあっても、いわゆる新制明治大学の二年目であり、さらに短期大学の設置、生田キャンパス開設準備等々が進められている。

この七〇周年記念式典は、この変革の時に当って明治大学の伝統を知らしめるためであった。そのために、大学の沿革を公開するとしている。この時も実質的には戦前と同じく藤沢が中心となっている。尾佐竹はすでに四年前に他界しているが、戦前の展示に関わったことのある伊藤省吾（前出）も活躍している。今日、遺されていた展示品を見ると新たに学外の故地・旧跡などを絵画に仕立てていることが分かる。例えば「駿河台御茶ノ水」、「甲賀町匂桜の由来」、「鶯谷初音の里」等々である（後章の「四 誌上展示」参照）。江戸時代以来盛んとなる観光・名所案内書の絵本版といえよう。当然、この作品はかつての大学展のような秘宝・珍品の類ではないが、やはり趣味的・懐古的な気嫌いがあり、その意味では相通じるところがある。

また学生の学術やスポーツの現状を紹介している。以上のことからすれば、この展示も戦前の大学展の要素を明確に継承している。ただし、その学術現況紹介コーナーでは、例えば工学部展や考古展のように新しい明治大学の一端をのぞかせているのである。

総体として、この展示は戦前の展示を踏襲しつつも、新しいそれを求めた部分もあるいわば中間的な存在であるといえよう。それでも新たな展示内容を模索したことは注目に値する。

(2) 明治大学の歴史展

戦後における次の展示は一九九三年一〇月五日より五日間、大学

会館六階会議室（現在の募金室、校友会会議室、事業課事務室）を中心に開催された「明治大学の歴史展」である。本章の前節でも述べたように、明治大学にとっては実に約半世紀ぶりの大学史展ということになる。それだけの期間、行なわれなかった最大の理由は明治大学百年史編纂事業のためである。そもそもこの編纂事業は八〇年史編纂に端を発する（この詳細については、ここでは省略する）ものであり、大学としてはかなりの人員・経費・期間により大々的に行なったのである。

ただしこの間、学内で全く大学史展が行なわれなかったわけではない。政治経済学部創立五〇周年記念展覧会（昭和一九年五月二二・二三日）、法科創立七五周年記念展覧会（昭和三〇年一月一九・二一日）、創立八〇周年記念アラスカ展（昭和三五年一月一〜五日）、文学部創立五〇周年記念「駿河台を歩いた文学者たち」展（昭和四八年一月一〜一〇日）といった小規模の展示はなされている。

この「明治大学の歴史展」については、終了後、筆者は『明治大学の歴史展』の経緯」と題して百年史編纂時代の紀要『明治大学史紀要』第一号にまとめた。詳細は同誌を一読されたい。いずれにしても、この展示には目的が二点あった。その第一は先の見えた百年史編纂後のことであり、具体的には大学資料館開設実現のためであった。「雁行」ということばがあるが、編纂をしつつも、すでに次の段階に向けて展開しはじめる（つまり頭出しをする）必要があったのである。いふなれば編纂終了とともに明治大学の大学史活動を閉じてしまふ、そのような時代ではなかったためであり、百年史編纂で培った経験と成果をさらに広げねばならなかったためである。

もうひとつの開催理由は、同年に全国大学史関係団体が東西合併を意図した全国研究会を東京で開催、会場校として明治大学が選ばれたからである。このことは一方、われわれにとっても明治大学の大学史活動を学内外に知らしめる絶好の機会であると思ったからである。

こうした目的のもとに、実施されたのが、視聴覚的に明確に伝達できる展示という手段であった。今日、考えてみるとこの頃、学内外では大学改革が叫ばれるようになったのであり、自校の点検・評価に多かれ少なかれ寄与できたのではないかとも思う。

とはいえ実行するのは容易なことではなかった。まず、まだ本務の百年史刊行は一卷分まるまる残されていたし、何よりも前節で述べたようにスタッフの中には展示経験を有する者は誰一人いなかったからである。早速、学内事務手続きでとまどった。また資料面でも文書・写真類は目録が作成されていたものの、物品類はなされていなかった。まして学外の関係資料に至っては、部分的にしか把握していなかった。とにかくやること、なすこと全てが初体験、いわば手探り状態であり、新たに修得する事柄があまりにも多かった。それでも本稿冒頭で述べたように他大学のアドバイスを受れたり、学内機関・部署の協力を得たり、展示業者の熱意にうたれたり、さらにはスタッフ全員の奮闘によって無事終えることができた。

この時の展示は、刊行済の『明治大学百年史』資料編の構成をもとにした。つまり編年的に追う、いわばオーソドックスな展示であった。このような堅実な方法をとったのは、久しぶり、かつ本学における本格的な大学史展としては、最初のことであったがゆえである。

(3) 明治大学記念館歴史展

今回の展示は、明治大学、そしてお茶の水のシンボルとして長く君臨してきた記念館の解体によるイベント「明治大学記念館さよならイベント」の一環として行なわれたものであり、一九九五年一月七日から一日まで開催された。展示は解体される校舎で行なうことに意味があるため、記念館に連なる右側一階二部学生課跡とした。同課は移転済とはいえ、遺留の施設設備もあり、まずはそれらの撤去からはじまった。アルバイト一名が配置されたとはいえ、人員・経費の面でもかなりハンディを背負って始めた⁵⁾。例えば展示の備品調達はレンタル業者のリスト作りからはじめたのである。まさに手作り展示を実感したのであるが、それだけに愛着も湧き、この行事の中心となった方から「味のある展示だ」と声をかけられた時は労苦も忘れたほどである。

この展示は記念館という一種のテーマ展であるため、時系列よりも空間(場)を強調した展示をすることとなった。むろん年次的に追う部分も含まれてはいたが、例えば記念館の内と外、記念館を支えた陰の人々といったような調子である。また学内教職員からは多くの記念館関係グッズの寄贈を受け、それによりコーナーを設けることにより、「場」の展示を強くうったえることもできた。

本展示は環境条件としては必ずしも良くはなかったが、各部署・関係者の協力によって成った手作り展示として印象に残った。

(4) 明治大学史展

記念館の跡には、新校舎(「リバティタワー」)が竣工した。その

ことを慶賀するとともに、これを機に大学史展を催すことにより明治大学一一七年の歴史を振り返り、さらに将来を考える糧を得ようという気運が盛り上った。それにより一九九七年一〇月に予算要求をし、翌年二月には内示を得ていた。

この企画はやがて大学全体のリバイタワー竣工記念実行委員会に組み込まれる形となったため、組織・規模・経費の面ではかなり強力なものとなった。おそらくはそれまでの明治大学における大学史展としてはさまざまな面で比較にならないものであろう。期間は一九九八年一月一九日～二四日（祝日を一日含む）、わずか五日間であったが、それは新校舎ゆえ、利用希望が多かったためである。会場は最上階・二三階の岸本辰雄記念ホール・サロン紫紺・伊藤紫虹ホールの三室が当てられた。展覧のための条件としては施設設備上問題がありながらも、克服すべく展示業者と打ち合わせを重ねた。

展示構成の最大の特色は、時（例・年表）と場（例・事典）の組み合わせによる立体的構成を企図したことである。われわれはすでに「明治大学の歴史展」ではオーソドックスな年代的展示を、次の「明治大学記念館歴史展」ではテーマによる空間（場）的展示を経験していた。だが、資料をもとに構成してみると簡単にはいかず、試行錯誤の繰り返しであった。その結果、たどりついたのは自稱「キャバラン方式」である。すなわち、隊商に見立てて、連結する紐の部分の時系列展示、ラクダの所を空間（テーマ）的展示とイメージして構成することとした。明治大学の歴史を年代順に追ってきて、途中、トピックスのようなコーナーで一息ついてもらおうというようなイメージであった。

展示内容の面で、最も意識した項目は校友のことであった。校友

は大学を構成する重要な存在であるとともに、この展示が第一回のホーム・カミングデーと重なることにより、多くの卒業生やその関係者による見学が想定されたからである。

したがって展示技術の面では、極力わかりやすく、見やすく、親しみやすいことに心がけた。とくに年表や説明の表現、あるいは展示品の選定やそのしかけに関して、そのことにとめたつもりである。

今回の展示の入場者は五四八八名であった。事後、アンケートを整理する中でそれまでの展示でもそうであったが、この時の展示では常設展の設置を望む声がかなり多く、強くあった。そのため、当時の歴史編纂事務室は学生会館一階ロビーを利用した「ミニ歴史展」の開催を要望し、一九九九年二月二五日の「学園をみまもってきた記念館」を第一回として開始、その後テーマを変えつつ、今日まで続けられている。

この展示は質量ともに本格的大学史展らしいものを実現できたことと、のちに実現する常設展示場開設のきっかけとなったともいえる。もはや明治大学の大学史活動にあって展示は重要な位置を占めるようになった。

なお、本展示についての詳細は『歴史編纂事務室報告』第二十集の「明治大学歴史展の報告」を参照されたい。

(5) 明治大学創立一二〇周年・創業者生誕一五〇年記念展

二〇〇一年は明治大学にとって記念すべき年であった。それは創立一二〇年目を迎えたことであるとともに、その創業者（とくに初代校長岸本辰雄）が生誕して一五〇年を経たからであった。そして

それを契機に、到来した二一世紀に向けて大きくはばたこうという気運が高揚した。

今回の展示は同年一月一日から七日、正味五日間、前回と同じリビティタワー内、岸本辰雄記念ホール・サロン紫紺・伊藤紫虹ホールで行なわれた。この場所は前回の展示でも使用の仕方でも考慮したが、やはり創立者を記念した場所であることにより決定した。また備え付けの展示ケースの活用も試みた（前回は展示上、難点があり使用しなかった）。

今回の展示構成・内容上の特徴はテーマを特に設けることとし、それを「建学の精神とその歴史」とした。したがって、構成・内容としては創立者のこと、およびその周辺の人々のことを第一とした。いふなれば明治大学の原点を見出さんとするものである。しかし実際、それまで明治大学の大学史展で創立者そのものを取り上げたことはなかった。その理由は資料不足のためである。とはいえ、そのことをなげくゆとりはなく、学内外の関係資料の徹底調査、資料の借用や複製化、あるいは展示技術の駆使で補うこととした。

なお、この時、入口には創立時の校舎の校門を想い、作成したり、その門をくぐると、会場の中央部に創立者三人の誓い「同心協力」をイメージした三本の柱による三角錐状、その頂上は三木武夫筆



明治大学創立120周年・創立者生誕150年記念展

「権利自由」の額、横には校旗という配置や細工はのちの常設展の「シンボル・ゾーン」の原型となっている。

第二の特色は「建学の精神を受け継いで」としたコーナーを設けたことであり、ここではまず「その1」として岸本辰雄没後について特徴的な事柄（テーマ）、とりわけ建学の精神が反映されている事柄（テーマ）を選定し、それを年次的に展示した。さらに「その2」として創立二〇周年記念以来の各記念式典の資料を順次、一〇〇周年まで紹介した。これはいうまでもなく、創立一二〇周年の記念式典が実施されたことに合わせるものであった。

さらに第三の特色としては、最後に「二世紀を拓く」というコーナーを設けたことである。ここではとくに大学の経営、大学改革、校友の活躍、学生のスポーツ等を中心として展示につとめた、このコーナーもまたやがて実現する常設展示場の「テーマ・ゾーン」に生かされることとなった。

このようにして見てくるとこの展示は前回のような時系列の中に空間（テーマ）を挿入するのではなく、空間（テーマ）の中で時系列の形をとったといえる。またそのテーマ・コーナーが、のちの常設展示の構成に援用されることとなった。

本展示は当初より大学全体の記念事業の一環として位置付けられ、実行委員会の傘下にあったため、人員、経費、協力体制、さまざまな面で、それまでの明治大学史展をはるかにしのぐ結果となった。

そして、この展示は明治大学における大学史活動の意義をアピールするために一役かったのである。さらにいえば、のちの大学史資料センター開設に影響を与えた展示であったといえよう。そして、少なくとも同センター開設の翌年（本年度）にオープンした、大学史

展示室の構成上の基礎となったことは事実である。

なお、本展示は『歴史編纂事務室報告』第二十三集に「総括 明治大学創立一二〇周年・創立者生誕一五〇年記念展」として詳記してある。

4 従来の明治大学展から考えること

本章では、過去に明治大学で行なってきた主な大学史展を検討してきた。そして、そこではその時、その場での状況や環境の中で、それまでの経験を生かしつつ、さらにより良さを求めて当ってきたわけである。

しかし問題というか、課題も少なくない。それは毎回の展示において苦悩したことであるが、世の中、数多くある展示の中で、大学史の展示そのもの、つまり大学史展固有の特色・独自性は何かということがある。確かに、大学史展により大学の過去を振りかえるとともに、今後のあり方を考えるという目的で行なってきた。それは間違いであったとは思われない。しかし、それは良くいえば大目標、悪くいえば空念仏にすぎないのである。もっと具体化・実際化させねばならないのである。とりわけ、この問題はめざしていた大学資料館設立上の理念や目的につながる問題であると思っただからである。その具現化をめざした結果はのちに当大学史資料センターの目標として、かつての編纂経験とともに大なり、小なり生かされることとなった。その内訳は、大学の「顔」としての存在、帰属意識の場、情報のサービス、伝統の維持・発展、大学史の開拓・構築といったことである。

ただし、これらの項目もやがて再検討の必要が迫られてこよう。とりわけ「知」の場としての大学の存在、研究・教育活動との関わり等々のことをも強く意識しなければならぬであろう。さらに大学改革・経営戦略・将来構想策定に直接関わることも考えられよう。それは過去の追懐も必要であるが、大学の将来・未来のことも強く意識し、深く関わっていかねばならないからである。

本章の最後に大学史展の今後について、付言しておきたいことがある。それは近年、各大学に常設展示場を設置したり、しようとしているところが少なくないことである。また常設ではなくとも特別展・企画展を実施している大学は多い。さらに博物館などにおいて大学史の分野をテーマに取り上げるケースも見上げられるようになってきた。このような中で、時には個別大学だけではなく、各大学、あるいは博物館などと共同してできないかということである。そのことを筆者が意識するようになったのは、二〇〇〇年六月に文京区ふるさと歴史館で「明治青年の夢——大学史と地方史について——」を講演した時であり、同館学芸員から反響が大であったと伝えられたからである。また翌年の一月から三月に千代田区立四番町歴史民俗資料館で行なわれた「明治・大正の大学案内／人材養成請け負います」を見学した時には、各大学の紹介の部分が大変印象的であった⁶。いずれにしても、大学史をもっとと報知していく必要を実感したわけである。その意味でも明治大学史資料センターでは社会人向大学史講座を本年度より開設、その中に展示見学も含めたのであるが、こうした企画もさらに各大学あるいは博物館などと共同で行ないたいものである。

〔注〕

- (1) この発表以前、全国大学史資料協議会東日本部会の研究部会で、「大学資料の調査収集、その現状と課題」と題して発表をした。ただし、この発表の場合も中心は大学資料論であり、大学史活動の「広がり」・「深まり」論はその前提として紹介したものである。
- (2) 場所は一号館の三階である。
- (3) 刑事博物館が開館したのは昭和五年一〇月である(場所は記念館内)。この開設・運営に、本文中の大谷、尾佐竹、藤沢らは深く関わっている。
- (4) このことは八〇周年、一〇〇周年と続いたが、一二〇周年の時、元にもどし、二〇〇一年に式典がなされた。
- (5) そのため、学内各部署、とくに総務部では庶務・作業など、全員で協力してくれた。
- (6) 明治大学でも資料提供の役を担った。

資料 明治大学史展の歩み

開催期間	名 称	目 的	場 所
1928. 4.21～ 4.24 (昭和 3)	明治教育文化展覧会	震災復旧記念祝典	新館 3 階
1931.11. 1～11. 6 (昭和 6)	明大五十年史料展覧会	創立50周年記念	本館 3 階
1940.11.18～11.21 (昭和15)	近世文化展覧会	創立60周年記念 皇紀2600年奉祝	図書館 3 階
1950.11.17～11.19 (昭和25)	創立七十周年記念展覧会	創立70周年記念	記念館新館
1993.10. 5～10. 9 (平成 5)	明治大学の歴史展	百年史刊行記念 大学史 東西合同研究会開催記念	大学会館 5・6 階
1995.11. 7～11.11 (平成 7)	明治大学記念館歴史展	記念館さよならイベント	2 号館 1 階
1998.11.19～11.24 (平成10)	明治大学歴史展	リパティタワー竣工記念	リパティタワー 23階
2001.11. 1～11. 7 (平成13)	明治大学創立120周年・ 創立者生誕150年記念展	創立120周年記念 創立者生誕150年記念	リパティタワー 23階